# 柿

田んぼ道の用水路に沿った畑に柿の樹が植えられている。ゆっくり歩きながら、あらためて数えてみると十五本であった。細めの幹もあるが、それぞれの枝には、葉の数ほどあろうかと思える色づいた実が、重そうにぶら下がっている。たしか去年も同じ光景を目にした。このように、たわわに実をつけるようになったのは、いつの頃からだったろうか。考えていたら、傍らの犬が先へ行こうとリードを引っ張った。歩調を合わせながら歩く。そして歩きながら、この樹が植えられたのは・・・・・と思いをめぐらした。八年位前か。そう思ったのは、七歳半の犬の年齢からきている。生後三十五日で我が家にやってきた。この犬と初めて散歩した頃、小さな細い木が植えられていたような気がする。それといまひとつは、「柿八年」のことばが浮かんだからだった。記憶は定かでない。単純な先入観かもしれない。

柿八年・・・鮮明に思い出したことがある。

新潟市出身で、郷土料理研究家として名高い河内さくらさんが、加茂市に来られたときのことである。商店街のイベントだった。加茂信用金庫本店前のメインストリートに演台が設置された。司会者が、「それでは本日のゲスト、加茂さくらさんをご紹介します」と呼びかけた。うっかり苗字を間違えてしまったのだ。登場した河内さんは、「宝塚出身の加茂さくらさんとよく間違えられるんです。顔も名前も似ていますから」とにこやかに応じていた。

そんな河内さんがテレビの料理番組に出演していた。何気なく見ていると、調理の手を動かしながらアシスタントに、「桃栗三年柿八年」と言い、ひと呼吸おいて、「ユズのバカやろ十八年、そのまた大バカ枇杷の花」と続けた。河内さんの、おむすびのような可愛らしい笑顔と、すましたような表情を入り混ぜながら口にした、「・・・バカやろ・・・大バカ」の言い方が、とてもユーモラスに響いた。

「桃栗三年柿八年、ユズのバカやろ十八年、そのまた大バカ枇杷の花」

とても語呂がいい。すっかり気に入った私は、新入社員研修などで何回も使った。「君たち、桃栗三年柿八年ということばを知っているかな？」と言うと大概の連中は、「知

っています」と首をタテに振る。すかさず、「じゃあ、その後に続くことばがあるんだが？」と投げかける。誰も答えられない。そこで鼻高々と前述のことばを教えてやるのである。

その後、「色んな言い方があるらしいよ」という情報を小耳に挟んだ。そこで気になってインターネットで検索してみると、興味を抱いている人が結構いることがわかった。

今回、この文をまとめるにあたって、久しぶりにサイトをのぞいてみた。

小説「二十四の瞳」の原作者である壺井栄さんも、このたぐいのことばが好きだったようで、小豆島の文学碑に、「桃栗三年柿八年柚の大馬鹿十八年」と刻んであるという。

一九八三年に公開した原田知世主演の映画「時をかける少女」の中で、「桃栗三年柿八年、柚子は九年で成り下がる。梨の馬鹿めが十八年」とのセリフがあった。大林宣彦監督の創作という。

また、各地方地方で色んな採り上げ方をしている。

「梅は酸いとて十三年」、「ナシの大馬鹿十三年」、「枇杷は九年でなりかねる」など。年数と梅・梨・枇杷それに柚子などの名前が微妙にいりくんで組み合わされている。

ずい分古くから言われてきたらしいが、どの地方も、桃・栗ときて柿八年までは共通している。

新たに面白い文を目にした。

桃栗三年柿八年　梅はスイスイ十三年
梨はゆるゆる十五年　柚の大ばか十八年
ミカンのマヌケは二十年

桃栗三年柿八年　梅はすいすい十三年
ユズは大バカ十八年　りんごニコニコ
二十五年　女房の不作は六十年　亭主
の不作はこれまた一生
あーこりゃこりゃ

とあった。

様々な言い回しも、根底に流れる意味を汲み取ればいいことで、記された年数にあまりこだわる必要はないだろう。

人に個性があるように果樹にも個体差がある。ワセもあればオクテもある。みな与えられた環境の中で精一杯生きている。

この畑の柿の樹にも、自然の営みの面白さと、たわわに実をつける生命力をただ感

じるだけにしておきたい。